様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５３２００

研究課題名（和文）きょうだいは心理的バランスをとりあうか～同胞葛藤に関する新たな査定法の開発

研究課題名（英文）The Development of a New Assessment Battery on Sibling Conflict

研究代表者
肥後　功一（HIGO, KOICHI）

島根大学・学内共同利用施設等・理事

研究者番号：００１８３５７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：きょうだい関係，なかでも，きょうだい間の葛藤は，心理臨床相談の上で重要な意味をもっている。そのことは経験上は知られているが，これを査定する有効な方法は確立されていない。本研究は，きょうだい葛藤に関する新しい査定法を開発することをめざした。基礎的なモデルを確立するために，同性２人のきょうだいに焦点を絞り，３人の研究者がそれぞれ専門とする領域からのアプローチを行った。
研究成果として，きょうだい間葛藤をとらえるために有効な軸が抽出された。対比性，同調性，操作性，支配性，両義性，依存性などである。今後これらを臨床仮設の中に構造的に位置づけ，査定法を確立することが必要である。

研究成果の概要（英文）：Clinical psychologists have known the relationship between siblings,especially sibling conflict, has significant implications for psychotherapy. But the methodof assessment on sibling conflict has not been established. We tried to develop a new assessment battery on it. For getting a basic research model, we dealt with siblings of two same sex. 3 approaches specialized by each researcher carried out.
The findings suggested some important axis that can represent sibling conflict.They are contrast,sympathy, manipulation,control,ambivalency,and dependency.The construction of clinical hypothesis that can contain them and the development of a practical assessment battery has remained.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：きょうだい間葛藤

１．研究開始当初の背景

心理学の各領域において「きょうだい」というテーマは古くからある。臨床心理学領域でも同様であるが，発達心理学や社会心理学にける実証的な取組みに比べると，その膨大な「臨床知」とは対照的に，これを理論化し検証する研究はほとんど見られない。以下，そうした事情の背景及び本研究の位置づけについて述べる。

（１）個体内特性としての表象的関係

臨床心理学における研究テーマは，歴史的には「個体内特性」を中心に展開してきた。それは通常の心理学に対して，臨床心理学がいわゆる「異常心理学」にその一つの起源を有することによると考えられる。すなわち「正常」ではない事例を収集し，その心理状態の詳細な観察・記述，原因や背景の究明，介入・治療経過の分析などを基礎としながら，それらの集積によって病理的な心理現象に関する理論モデルを構築することが，この分野の土台を形作ってきたのである。

たしかに精神分析学においては，たとえば「投影」や「防衛」や「転移」などの代表的な概念にも現れているように，「個体内特性」を扱っていながら，そこに他者の存在が根深く前提されていることは言うまでもない。ただしそこで想定されている他者（病理性の因としての他者）とは，生育史の初期に，個体の記憶の深層に刻み込まれた「内なる他者」なのであり，それが主体の意識下において自己化している（もう一人の“私”と化している）点がモデルの枢要となっている。エディプス・コンプレックスは紛れもなく親子関係に由来する概念ではあるが，それは具体の二者「関係」というよりも，個体内に内面化された「関係性」，表象的関係の問題なのであった。

こうした事情をベースとして，精神分析学の一派が子どもの病理現象を治療の対象として本格的に取り扱かおうとしたとき，親子関係の問題が早期に浮上したのは当然のことであろう。対象関係論，愛着理論などが，親子関係の問題を扱うための今日の基礎的な理論となっていることは言うまでもない。これらの理論における分析治療は基本的には子どもに焦点が当てられているので，実際の「生身の親子のやりとり」が扱われないわけではなかったが，しかし依然として，そこで取扱われている親子関係の理論自体は，子どもの内面に形成される表象的関係を中心に展開される傾向にある。古くは M.クライン，新しくは D.スターンのモデルなどにその傾向が顕著に見られると言えよう。

（２）愛着理論から発展した体系

J.ボウルビ―の愛着理論についても，IWM 概念に代表されるように，やはり同様の表象的関係重視の傾向は，当然ながらある。けれどもこの理論の中に，M.D.S.エインズワースによるストレンジ・シチュエーション法が導入されるに至って，実証困難な内面（表象的関係）を扱うことから，「実際の親子のやりとり」を観察・評価し「愛着の質を分類する」手続きを確立する方向へと研究の方向性が大きく変化したといえる。実際，精神分析学を母体とする理論でありながら，愛着理論は今日の実証的発達心理学研究に大きな影響を与えている。

（３）きょうだい関係

このように心理臨床研究は主として２者関係（とりわけ親子関係というタテの関係）を前提として展開されており，きょうだいというナナメの関係への実証的な取組みは乏しいが，一方，さまざまな心理臨床場面においてその重要性はよく知られている。不登校傾向がきょうだいにおいて共有されがちなケース，きょうだいの一方に障がいがある場合のもう一方のきょうだいの問題，虐待や DV など家族関係に深刻な課題を抱えている場合のきょうだい関係など，日々の臨床においては，この特有の関係が治療上の重要な鍵となるケースが多いことは誰もが認めるところであろう。

２．研究の目的

以上に述べたように，臨床心理学領域における「きょうだい」研究は，発達心理学や社会心理学における実証的取組みに比べると，その膨大な「臨床知」とは対照的に，これを理論化し検証する研究はほとんど見られない。一方，何らかの心理的問題を抱えた子どもの“きょうだい”に対する心理臨床的支援の必要性・重要性は多くの臨床家の認識するところであり，実践的研究（事例報告等）の数も多い。しかし臨床心理学的実証研究の前提となる査定法が確立されていないため，支援方法の妥当性や支援の効果については経験知にまかされている現状がある。

本研究は「きょうだい関係をとらえるためのアセスメントバッテリー」開発の可能性を追求するものである。具体的には次の３つの研究目標を立ててアプローチする。

（１）サブカルチャー領域の嗜好に基づく査定法の開発（研究分担者　岩宮恵子担当）

（２）描画や箱庭を用いた査定方法の開発（研究分担者　三宅理子　担当…平成 23 年度及び 24 年度のみ）

（３）質問項目及び臨床観察項目による査定法の開発（研究代表者　肥後功一担当）

３．研究の方法

上述のように本研究は，きょうだい関係（主として同胞葛藤的関係）の査定法を３つのアプローチからなるバッテリーとして構築しようと試みた。その際「きょうだいの同調性／対比性」という軸を仮説的に置き，これを共通の基盤としながら各領域のアプローチの特色を活かして取り組むこととした。具体的には次の（１）から（３）に示す通りである。

（1）サブカルチャー領域の嗜好に基づく査定法の開発

岩宮（2009,2004 *）は現代の思春期心理臨床の風景を詳細に分析する中から，サブカルチャー（漫画，アニメ，歌（アイドル），TV ドラマ，小説，お笑いなど）への嗜好（指向）性が，家族力動やきょうだい関係とも深く関連している可能性を把握しており，こうした領域でのきょうだいの嗜好の同調性／対比性を検証することから新たな査定法の開発が可能ではないかとの考え，次の２つのアプローチをとった。

①これまでの面接事例を同胞葛藤の問題に絞り，本研究が仮説的に構成した対比性／同調性の軸によって解釈できるものと，それ以外の解釈軸の導入が必要なものとに分類する。

②思春期心理臨床を読み解く上で有用なサブカルチャーの各ジャンルについて，査定に利用可能な形で場面や状況の抽出を行う。

*岩宮恵子(2009)：フツーの子の思春期―心理臨床の現場から.岩波書店.
岩宮恵子(2004)：思春期をめぐる冒険―心理臨床と村上春樹の世界.日本評論社.

（2）描画や箱庭を用いた査定法の開発

三宅（1997,2004,2009 *）は描画資料及び箱庭の分析を通じて「水のある風景」を用いた査定法の可能性を追求してきた。これらの知見を，きょうだい関係に適用し同調性／対比性の軸などを用いた臨床的解釈に結びつけられるかどうかについて次のような手順で検証した。

①これまでの描画データを同胞葛藤の観点から分析し，本研究が仮説的に構成している同調性／対比性の軸によって解釈できるものと，それ以外の解釈軸の導入が必要なものに分類する。

②同胞葛藤の投影に適した「水のある風景」のサンプルを収集・分析する。

*三宅理子(2009)：「水のある風景」の描画と Y-G 性格検査との関連.島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第 43 巻,79-85.
三宅理子(2004)：箱庭で表現される「水のある風景」と Y-G 性格検査との関連―風景としての水イメージの重要性.島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要,2,11-23.
三宅理子(1997)：風景としての水とそのイメージ.甲南大学臨床心理研究 6,87-94.

（3）質問項目及び臨床観察項目による査定方法の開発

肥後（2009,2004,2003,2001 *）は乳幼児期から児童期の子どもの心理臨床的課題を明らかにする中から，きょうだい関係に関して「同調性／対比性」という軸を措定した査定方法の構築可能性を次のように構想してきた。

①発達心理学や社会心理学なども含め，きょうだい関係に関する尺度項目を分析し，心理臨床実践への活用可能性という観点からあらためて検証するとともに，臨床心理学における事例報告の中で同胞葛藤が主要なテーマとなっているものを選び，その構成概念を抽出することによって，臨床観察項目のリストサンプルを作成する。

②保育者や母親への面接（インタビュー）を通じてきょうだい間の関係に特徴的な軸を抽出し，仮説的に置かれた同調性／対比性の軸との関連を検討する。

*肥後功一(2009)：保育所における親子関係支援に関する基礎的研究(1).島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第 43 巻,67-77.
*肥後功一(2004)：“気になる子”の心理臨床的理解(第 2 報):小学校担任による「子どもの気になる様子」の認知.島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要,3,83-97.
*肥後功一(2003)：通じ合うことの心理臨床.同成社.
*肥後功一(2001)：“気になる子”の心理臨床的理解(第 1 報):保育者による“気になる子”の記述から.島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター紀要,1,61-77.

４．研究成果

（1）「サブカルチャー領域の嗜好に基づく査定法の開発」について

多くの面接相談事例を通じて漫画，音楽，アイドルグループ等に対するきょうだい間での嗜好の違いや同調が見られることに着目し，事例の収集・分析を試みた。結果的にはより広い生活習慣や学習における志向性を取り込んで指標化した方が，臨床上，有益であることが明らかになった。

（2）「描画や箱庭を用いた査定法の開発」について

描画や箱庭の記録等から，きょうだい間の葛藤などの関係性が読み取れることが多くあることから，何らかの指標の抽出が可能と考えた。最終年度においては研究分担者（三宅）が転出したため，この研究（2）は上述研究（1）に包含して考察することとした。結果として，投影法指標は各枠組み内で固有の意味を付与されているため，その切り取りは極めて困難であることがわかった。

（3）「質問項目及び臨床観察項目による査定方法の開発」について

きょうだい間葛藤を扱った文献等から抽出された臨床観察項目（インタビュー場面においては質問項目を含む）の有効性について検討するため，主に保育所における観察及び保育者や保護者へのインタビューを実施した。その結果，同胞葛藤を中心とするきょうだい関係を査定するバッテリーを構成するのに有益と思われる新たな次元が明らかになり，全体協議の中で検討された。

（4）結論

３つの領域からのアプローチを総括する形で次の結論が得られた。きょうだい関係（同胞葛藤）は関係性を含んだ複雑な概念であることから，当初より，できる限り単純化

した事態・状況に焦点を当ててモデル化していこうと考えて取組んできた。「同調性／対比性」という非常に単純化された次元を敢えて仮説的に基盤に置いて取りかかったのもそのような理由による。しかし，サブカルチャー領域の事例分析（研究（１））や描画や箱庭という投影法領域の表現分析（研究（２））においては，やはり単純化することによる捨象が事例の本質的な意味を曖昧にしたり，単純化が固有の表現を成り立たせている枠組みを消し去ってしまうこと等によって，研究上の大きな困難に立ち向かわざるを得なかった。

さらに，きょうだいの関係は，当然ながら家族力動の中に存在しているため，家族力動から切り離してきょうだい関係のみを「同胞葛藤」として取り出そうとしても，そこにたとえば母親の愛情「をめぐる葛藤」であったり，父親からの承認「をめぐる葛藤」であったり，といった具合に，必ず家族（特に親子関係）力動が絡んでくることになり，研究（１）（２）ではこの問題を克服することが査定法確立の前段として無視できない程度に大きいことが了解された。

以上のことから，結果的には，同胞葛藤を核とするきょうだい関係を臨床的に有用な水準で査定するバッテリーを３年間で構築するという本研究の目標を達成することはできなかったが，今後，本領域の研究を進めていく上で非常に有益かつ実際的な示唆を得ることができた。それは具体的には，こうした近親者間の葛藤を布置するための次元の抽出ということである。当初より想定された「対比性」，「同調性」に加え，「操作性」，「支配性」，「両義性」，「依存性」などが有用性をもつであろう次元を構成する軸として考えられた。これらをもう一度，構造化された臨床仮説の中に位置づける作業を行い，再度，査定法に向けたアプローチを継続して行っていきたい。その際には（主に伝統的に精神分析学から示唆されてきた）同胞関係の葛藤的側面だけではなく，相互が助け合い，協同し合う特有の絆にも同等に着目していくことが重要だと考えられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
①肥後功一，同成社，育ち合うことの心理臨床―親と子の心を支える保育実践のために，2013（再版），226.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
肥後　功一（HIGO Koichi）
島根大学・学内共同利用施設等・理事
研究者番号：00183575

(2)研究分担者
岩宮　恵子（IWAMIYA Keiko）
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：50335543

三宅　理子（MIYAKE Riko）…平成 23 年度及び 24 年度の 2 年間のみ
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：20319833